

◆金澤健 選

私は、現今の最大の目標として「自然の情景をありのままに詠んで、尚且つ可笑しくて笑える句を詠む」ことを掲げております。参考となる句を定期的に投稿させて頂ければと思います。

ぶどう棚みんないい子になりたがる 中山恵子

今年も粒のそろったぶどうがたわわに成りました。どの子もきつといい子たちなのでしょう。「なりたがる」の措辞が利いています。

吊るし柿日にかたくなな貌になり 田中空壺

吊るし柿の渋面をみごとに捉えています。客観的に見ると辛い状況なのでしょうが、何故かおかし味を感じて、(そうだよなとつぶやきつつ)ニヤツとしてしまいます。作者は、柿を通して人間を描きたかったのでしょうか。

木守柿がき大将は孤独かも 佐藤美文

この句も前句同様、柿を通して人間を描いて見事です。「男はつらいよ」という有名なフレーズがありますが、がき大将の(そして木守柿の)そのような心境を捉え、五七五で表現しています。

国境を知らぬ草の実こぼれ合い 井上信子

私ごとですが、国境関係が複雑で紛争の絶えない中東地域を仕事で動き回っていた際、気付いたのは、名も知らぬ草花が国境線などお構いなく生え茂っており、おそらく、草の実も人間の思惑など無視して、こぼれ合っているのだろうなどの感慨ひとしおです。可笑しくもあり、切実でもあり、そしてスケールの大きい句とだ思います。

夜桜に抱かれて眠る天守閣 吉岡龍城

ここで詠まれている天守閣は、熊本城のそれです。今の惨状を思うと、笑っている場合ではありませんが、作者の句意としては、「ほのぼのとしており、思わず微笑んでしまうような情景」を句にして遺したかったのでしょうか。合掌。以上、いずれも川柳句(「現代川柳のバイブル 名句1000」より抜粋)です。これからは、俳句集からも拾っていきたいと思います。作業を通じて「花鳥諷詠滑稽句が大いに成り立つこと。そのような句を詠むコツのようなものは何か」を探って行ければと考えています。

◆伊藤洋二 選 ～第二松風会句会より～

実南天の赤山門のひと所 高市光子

南天(なんてん)は「難を転ずる」と解して鬼門(北東)に、裏鬼門(南西)には万年青(おもと)と、縁起のよい植物を植えると風水に良いとのこと。新築の時に「岳父」に植えて頂いた。有難きかな親の恩、お彼岸に献杯し最敬礼しよう。月遅れの常楽会の案内が昔ながらの朱色で貼ってあった。尊崇の一句。

角餅に慣れぬがままに三歳過ぐ 砂路

お雑煮の形は東日本が角餅、西日本が丸餅に分かれるようだ。うどん・そばのつゆの色も関東は濃く、関西は薄いのは何らかの関連があるのかも。“伊予

の味付」に馴染む筆者は、焼き角餅は善哉に入るもの。山手線の立食いそばを通算十五年頂いたが、お汁の色には慣れた。和食礼賛の一句。

水仙花南南東へ身をよじる 倭

『北北西に進路を取れ』(ヒッチコック監督ケーリー・グラント主演)はミステリー映画の傑作。北北西の真逆は『南南東』である。「逆もまた真なり」で、一見、正反対の事柄でも本質は同じであることも。女流俳人四Tの一人、中村汀女の句、「水仙や東ねし花のそむきあひ」。水仙を愛でる一句。

札所めぐりの旅の支度や雪催 木下眞佐

筆者が秩父観音霊場を巡礼したのは、御眷属の午歳総開帳の頃であった。西武池袋線で秩父路へ、武甲山の雪景色が広がっていた。山腹にはセメント製造の石灰が削り取られた跡が。その白鉢巻は、戦後日本の成長を支えたレガシーに見えた。南無観世音 オン・アロリキャ・ソワカ 発心の一句。

願文唱ふ鈴ひびかせる息白し 小笠原満喜恵

家内安全・無病息災・商売繁盛・心願成就を氏神様に祈念する善男善女。そして、「人事を尽くして天命を待つ」との誓文が魔除の霊力があるとされる。鈴の音と「オー…」という警蹕に導かれ神馬の冷気に乗り天まで昇る。今年も早や第一コーナーを過ぎた。一度鞭をいれよう。凜として決意の一句。

数へるは難儀鬼豆の八十は 藤本のり子

炒って邪気を払った鬼豆を、数え年に一つ足して頂くのは、次の年も健康で過ごせるためらしいです。来年の話をするとう鬼が笑うとか言いますが、笑う門には福来るとも云われます。「まめまめしい」とは「豆豆しい」かと思いきや、「忠実忠実しい」であった。歯医者予約日、雑学に燃える一句。

暖房をつけねばそろそろ父戻る 山崎美樹子

筆者はエアコン等の電気暖房はあまり使わない。厚着をし五臓六腑へ芋のガソリンを入れて内燃させるのです。電気という文明の利器のお蔭でこの原稿を書くが、如何せん見えない物を儉約するのは要するに「自己中のケチ」と見做されるが仕方なし。停電経験世代の戯言。親思いの特選句。

寒雀見つめる風のひとところ 二宮由紀恵

パソコンを駆使してお手製句集を編集中。現在七十九句収録済みで、この句を至高の句として引用掲載させて頂きました。句会の醍醐味は、失意と優越感の掛け合い、主宰の添削による「目から鱗の極意」を授かることです。「石鎚の寝耳に春の時雨かな」を「石鎚の寝耳に春の時雨とは」に添削いただく。言葉の威力である。本題に入ります。羽毛を膨らませ寒風に向かって佇む一羽の雀。見据える石鎚山に春近し。素晴らしい感動に感謝の一句。